

EUGENE ROUSSEAU  
SAXOPHONE  
HIGH TONES

ユージン・ルソー

サクソフォン奏者のための高音奏法

*A systematic Approach to the Extension of the Range of  
All the Saxophones: Alto, Tenor, and Baritone*

第2版

ユージン・ルソー 著 / 北山敦康 訳

Étoile Music

A DIVISION OF  
LAUREN KEISER MUSIC PUBLISHING

# SAXOPHONE HIGH TONES

## SECOND EDITION

**Eugene Rousseau**

Japanese translation by Atsuyasu Kitayama

Copyright © 1991 Norruth Music, Inc. This edition Copyright © 2014 Lauren Keiser Music Publishing (ASCAP). All rights reserved. International Copyright Secured. No part of this publication may be reproduced, stored in a retrieval system, or transmitted—in any form or by any means now known or later developed—without prior written permission from the publisher except in the case of brief quotations embodied in critical articles and reviews.

ISBN: 1-58106-182-X

Printed in USA

For information and catalogs, contact:

Lauren Keiser Music Publishing  
10750 Indian Head Industrial Blvd.  
St. Louis, MO 63132 USA

Phone: 203-560-9436  
Fax: 314-270-5305  
Email: [info@laurenkeisermusic.com](mailto:info@laurenkeisermusic.com)  
Website: [laurenkeisermusic.com](http://laurenkeisermusic.com)

# 目次

初版への序文 .....	iv
第2版への序文 .....	iv
序文に寄せて .....	v
通常音域の運指表 .....	vi
準備練習 .....	1
アンブシュア .....	1
自然倍音 .....	1
クローズドチューブの練習 .....	2
音響学的観察と通気孔の働き .....	7
ベントキーの練習 .....	12
オーバーブロー6度 .....	14
RSK4によるベンディング .....	15
倍音のモード .....	22
音域の連結 .....	26
実践的なモードの組み合わせ .....	31
オーバーブロー6度のさらに上の倍音 .....	34
高音域の運指表 .....	37
ソプラノ .....	37
アルト .....	39
テナー .....	41
バリトン .....	43
高音域の練習 .....	47
半音階 .....	47
長音階：1オクターブ .....	51
長音階：全音域 .....	52
長音階のアルペジオ .....	56
和声的短音階：1オクターブ .....	57
和声的短音階：全音域 .....	58
短音階のアルペジオ .....	63
旋律的短音階：1オクターブ .....	64
旋律的短音階：全音域 .....	65
全音音階 .....	69
増三和音のアルペジオ .....	70
ディミニッシュト・スケール（オクタトニック） .....	71
減七和音のアルペジオ .....	73
3度の練習 .....	75
五音音階 .....	76
ハイトーンのアーティキュレーション .....	79

## 初版への序文

サクソフォンの演奏に関して用いられる表現の可能性は、それぞれの奏者の経験や能力によって様々である。サクソフォンは木管楽器の中では新しい歴史を持つ楽器であるが、その能力の高さは早くから評価されていた。今では、音楽の様式や演奏形態を越えて活躍する優れたサクソフォン奏者が世界中にいて、その数は確実に増え続けている。また、現代の作曲家によるオリジナル作品や編曲された音楽史上の名曲を含めて、この楽器に関する出版物もその豊富な資源から発見されつつある。

この本で取り上げたハーモニックスあるいは通常音域よりも上の倍音に関する奏法も、そういった数あるサクソフォンの進化のひとつである。サクソフォンの音域を拡大することは、長年にわたって多くの演奏家、教師、作曲家等が深い関心を持つところであり、著者自身もその関心を共有する者として以下のページを書いている。

ユージン・ルソー

1978年4月

## 第2版への序文

20年以上前に初めて世に出たこの〈サクソフォン奏者のための高音奏法〉は、これまで多くのサクソフォン奏者に利用されてきた。そして、この間も私は自分自身の研究を続けるとともに、多くの学生と出会う中で考察を重ねてきた。マルセル・ミュールが彼の生徒によく言っていたように、学びのプロセスは常に継続し、そこに「到達点はない」のである。

当然予想されたように、この第2版にはさらに多くのフィンガリングが掲載されている。しかし、もっと大切なことは、フィンガリングの分類とそれらの派生、特徴、実用性である。その昔、「ひとつのサクソフォンが演奏できれば全てを演奏できる」という表現が一般常識として受け入れられていたが、今では教師や演奏家たちはこれが真実ではないということを知っている。それゆえに、他の楽器よりもアルトが最も多く演奏されているが、本書ではソプラノやテナーやバリトンのフィンガリングの違いへの配慮を欠かさないようにした。

サクソフォンの通常音域よりも高い音域で流暢に演奏する能力は、もはや飾りや付け足しなどではない。それは必要かつ不可欠な能力なのである。かつてミュール先生が言われたように、探究の旅は果てしなく続き終着点はない。著者として、本書がハイトーンへの旅を照らす灯りとなって読者の役に立つことを心より願っている。

ユージン・ルソー

2000年9月

ミネアポリスにて

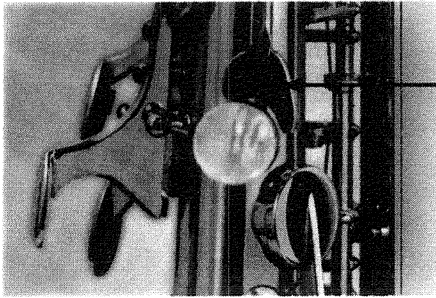
## 序文に寄せて

1978年の初版以来、私はユージン・ルソー氏の名著である「サクソフォン奏者のための高音奏法」を参照してきました。それは、パリ音楽院の学生たちにとって欠かすことのできない参考書でした。この本では、オーバードブローによる自然倍音の練習と様々な演奏状況に適応するためのフィンガリングの練習が効果的に組み合わせられています。さらに、各音域の練習で、これらの新たに獲得された技術を練習に取り入れる実際的な方法を提供します。

第2版では、追加された数多くのフィンガリングもさることながら、拡大された音域の音響学的側面のさらなる研究成果をもって、私が望む全てを満たしてくれました。ユージン・ルソー氏のサクソフォン教育に対する輝かしい貢献に深い感謝を捧げます。

パリ音楽院サクソフォン科教授  
クロード・ドラングル

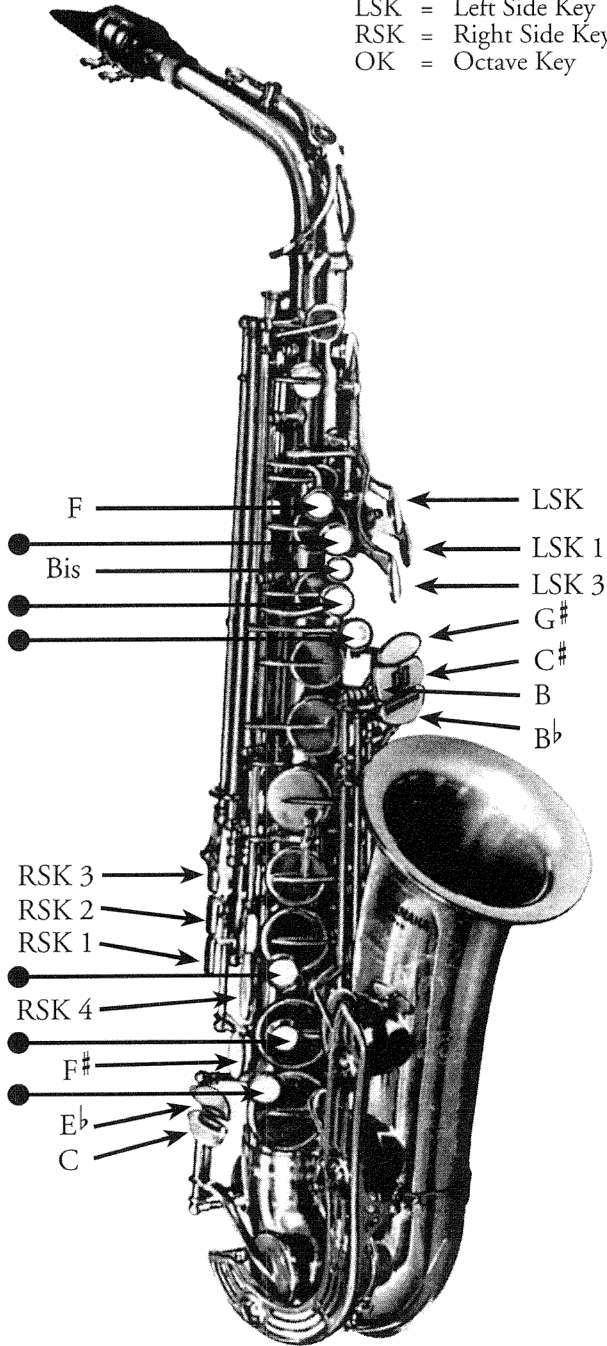
# 通常音域の運指表



OK

左親指

LSK = Left Side Key  
RSK = Right Side Key  
OK = Octave Key



Musical notation for notes A#, Bb, B, C, C#, Db. Includes fingering diagrams for each note.

2つの音が同じフィンガリングで示されている場合、低い方の音は図の通りのフィンガリングであり、高い方の音は OKを加える。

Musical notation for notes D, D#, Eb, E, F. Includes fingering diagrams for each note.

Musical notation for notes F#, Gb, G, G#, Ab, A. Includes fingering diagrams for each note.

Musical notation for notes A#, Bb, B, C, C#, Db. Includes fingering diagrams for each note.

Musical notation for notes D, D#, Eb, E, F, F#, Gb. Includes fingering diagrams for each note.

\* 第1オクターブのみ  
\*\* 第2オクターブのみ

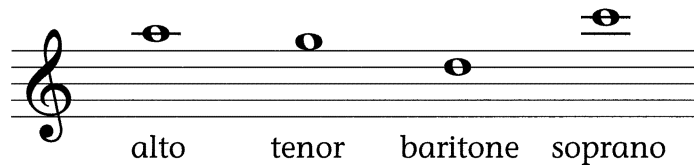
# 準備練習

## アンブシュア

サクソフォンのハーモニクス奏法をマスターするのに必要なものは「良い音」である。そして、これは全ての管楽器に共通することであるが、「良い音」は正しいアンブシュアによってのみもたらされる。本書は初心者を対象としたものではないが、ハーモニクスの練習を始めるにあたって、読者は以下のようなサクソフォンのアンブシュアの基礎について十分に理解していかなくてはならない。

- (1) 下唇を下の歯の上に軽く巻き入れる。
- (2) 顎を自然な位置に保つ。
- (3) 唇および口全体を「ウー」という発音をするときの形にする。
- (4) 口で丸い形をつくる。(このとき下唇は中央に寄せられた状態になる。)
- (5) マウスピースだけを口の中に入れ、上の歯をマウスピースの上部にしっかりと置く。
- (6) そのままの形でマウスピース全体を包み込むようにしっかりと保持する。

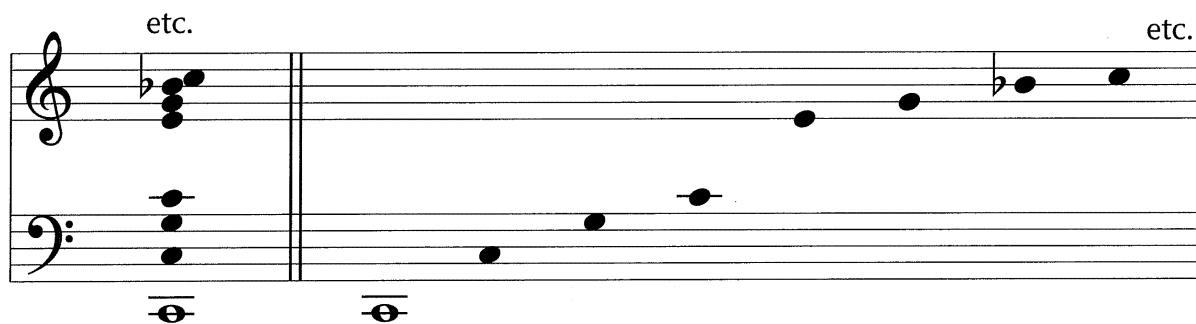
マウスピースをくわえる深さや丸く形づくられた口の圧力が適切なものであれば、マウスピースだけでつくられるピッチ(実音)は下記ようになる。ただし、このテストは常にフォルティッシモで吹かなくてはならない。



もし、マウスピースだけで得られるピッチがこれよりも高ければ、アンブシュアを変えずに吹き込む息の方向を下にする。逆にこれよりも低ければ、息の方向を上にとよい。吹き込む息の方向で正しいピッチが得られるならば、アンブシュアを緩めたり、あるいは締めたりしてはならない。

## 自然倍音

管楽器で生み出されるひとつひとつの音は、その音(これを基音と呼ぶ)の上に自然倍音と呼ばれるいくつかの音を含んでいる。それらは、基音のように実際に聴こえる(あるいは最も強く聴こえる)わけではないが、基音が鳴っているときに異なる強さで同時に鳴っている。これらの音を自然倍音と呼んでいるが、ハーモニクス奏法に関心のある読者はすでに知っていることと思う。



アンブシュアと吹き込む息の圧力を変えることによって、基音を通り越して、倍音をあたかも基音のように鳴らすことができる。このためには、アンブシュアを通常よりも強めにし（きつく、しかし丸く）、リードはわずかに多めに口の中に入っていることが必要である。ただし、これは下顎を軽く前に出すという意味であって、マウスピース自体を深くくわえるという意味ではない。

より高い倍音を出そうとするときは吹き込む息の量が少なくなるので、息の圧力は高められなければならない。このテクニックは、前のページに記載されているマウスピースだけのピッチを高めにするときと同じである。

以下の倍音列の練習は、全てのサクソフォンで同じように行うことができる。ただし、(1) 基音 (B, C, C#, etc.) が高くなるにしたがって倍音を得るのが難しくなり、(2) ソプラノのように管が短くなるとクローズドチューブ（音孔を全て閉じた状態の管）の倍音はより難しくなる。

Three musical staves illustrating harmonic series for different notes. Each staff shows a sequence of notes with their corresponding pitch bends (flats or sharps) and octave markings (8va). The first staff is for Bb, the second for C, and the third for C#. The notes are: Bb (1), Bb (2), C (3), C (4), C# (5), C# (6), D (7), D (8), E (9), E (10), F (11), F (12). The notes are marked with flats or sharps as appropriate, and the 8th and 9th notes are marked with '8va' and a dashed line indicating an octave shift.

### クローズドチューブの練習

Three musical staves showing exercises for closed tube playing. Each staff is in 4/4 time and features a sequence of notes with diamond-shaped markers below them, indicating fingerings or breath control techniques. The first staff is for Bb, the second for C, and the third for C#. The notes are: Bb (1), Bb (2), C (3), C (4), C# (5), C# (6), D (7), D (8), E (9), E (10), F (11), F (12). The notes are marked with flats or sharps as appropriate, and the 8th and 9th notes are marked with '8va' and a dashed line indicating an octave shift.



## 著者について

ユージン・ルソー。クラシックからジャズに至る広範囲な音楽に精通するサクソフォンの第一人者である。1965年のカーネギーホールでのデビューリサイタルで好評を博し、以来、独奏者としてのみならず、教育者、サクソフォン研究者として広く世界から高い評価を受けている。伝説的なサクソフォン奏者であるマルセル・ミュールは、彼のことを「すばらしいサクソフォン奏者であると同時に傑出した芸術家である」と絶賛し、世界中の評論家たちも同様にミュールの称賛を繰り返している。

世界中のオーケストラと共演している彼は、演奏録音の多いことでも知られ、サクソフォン愛好家の間で定評のあるサクソフォンとオーケストラによる最初のソロアルバム“Concertos for Saxophone” (Deutsche Grammophon, 1971年) やCDによる最初のサクソフォンアルバム“Saxophone Colors” (Delos, 1986年)をはじめ、ビッグバンドとの共演による“Mr. Mellow” (Liscio, 1990年) など数多くの録音を残している。また、楽曲の編曲・編集やメソッド等の学術的な著作も数多く出版し、それらの多くがフランス語、ドイツ語、日本語に翻訳されている。

彼は、1969年のワールドサクソフォンコンGRESS創設に尽力し、1979年から1980年まで北米サクソフォンアライアンスの会長を務め、1982年から1985年まで国際サクソフォン委員会の会長を務めた。これまで、プラハ音楽院、アリゾナ州立大学、ウィーン国立音楽大学の客員教授を務め、1993年にはプラハ音楽院から名誉教授の称号を受けている。

1972年以来、ルソーはヤマハのサクソフォン開発部門のチーフコンサルタントを務め、サクソフォンとマウスピースにおける芸術的・音響学的発展に貢献している。1964年から2000年までインディアナ大学音楽学部で特別教授の任にあり、2000年からはミネソタ大学音楽学部でサクソフォンを指導し、2003年には同大学で第13回ワールドサクソフォンコンGRESSを主催した。日本においても、浜松国際管楽器アカデミーなど数多くのマスタークラスで若いサクソフォン奏者たちが彼の薫陶を受けている。